



川の本

川の本

創立20周年記念号

財団法人河川環境管理財団

はじめに

「この川とは、なじみが深いのでしようね」

川のほとりに長くお住まいのお年寄りに話をむけると、きまpping

「昔の川は、それはそれはよかった。水は澄んでいて、魚も多かった。」

子供のころは、この川でよく泳いだものだ」

というような答えがかえってきます。

たしかに、川をとりまく環境は、昔より悪くなっているかもしれませんが。

けれども、まだまだ、大切な自然がたくさん残っているのもたしかなことです。

どうすれば、大切な川を守るができるのだろうか。

川をとりまく環境を、いまより良くするには、どうすればよいのだろう。

ひとりでも多くの人に、川とともにだちになってもらうには、なにをしたらよいのだろう。

そういう願いのもとに、今日まで

河川環境管理財団では、川をとりまく環境にかかわる事業や調査、研究を続けてきました。

そして、今年（平成七年）で、ちょうど二十周年をむかえます。

「川の本」は年二回、春と夏に発行し、みなさまにお読みいただいておりますが、

この本も財団と同じく二十周年をむかえ、今号が四十冊目になります。

そこで、二十周年記念号と題し、「川の本」総集編をおとどけすることにいたしました。

この号は、これまでの本のなかから記事を選びすぐり、さらに、あたらしいことがらをくわえた、いわば「小さな川の図書館」になっています。

まず、とびらをひらくと、六つの部屋に分かれています。

「民話の部屋」「歴史の部屋」「科学の部屋」……ほんとうに、川はさまざまな顔をもっています。

それぞれの部屋をおして、わたしたちのくらしにとって、なくてはならない川を、

少しでも理解していただけたら、と思っております。そして、ほんの少しでも「川を大切にしよう」と思っていただけなら、どんなに、うれしいことでしょう。

「小さな川の図書館へ、ようこそ」

この図書館は年中無休、年齢や入場時間にも制限はありません。

ほんとうの「川」も、この図書館も

ひとりでも多くのかたに、いつでも自由に楽しんでいただきたい、と心から願っております。

財団法人 河川環境管理財団 理事長

近藤徹

第一室 「民話の部屋へようこそ」

川から生まれたお話

八岐の大蛇 8

つんぶく達磨 12

王瀬の長者 16

河童の壺 20

なたとり湖 24

笛吹川の悲しい音色 28

おねじやだぬき 32

とつてもつきない七種のたね 36

ひょうげまつり 40

ミンツチのむこ入り 44

第二室 「歴史の部屋へようこそ」

川と人々のくらし

大昔から人々は川の近くに住んだ 50

人々のくらしを変えた稲作 52

登呂のむら 54

おそろしい洪水にのまれた登呂のむら 56

川にいどみ、水を治める戦いがはじまった 58

水をためて上手に利用した弘法大師(空海)と瀧濃池 60

あばれ川をなだめた武田信玄 62

水争い 64

利根川の流れを変えた家康と伊奈一族 66

熊沢蕃山と百間川 68

第四室 「自然かんさつの部屋へようこそ」

川と川辺の生き物と植物

上流で見かける植物 120

中流で見かける植物 122

下流で見かける植物 124

上流で見かける昆虫 126

中流で見かける昆虫 128

下流で見かける昆虫 130

上流で見かける魚 132

中流で見かける魚 134

下流で見かける魚 136

上流で見かける鳥 138

中流で見かける鳥 140

下流で見かける鳥 142

第五室 「遊びの部屋へようこそ」

川はともだち

サクラ堤が満開になった 146

スポーツがある イベントがある 148

河原は歓声でいっぱいだ 150

渓流はよんでいる 152

カンタンな魚とり 154

河原では君も 156

ガリバーになれる 158

ファイトブル先生になれる 160

第六室 「カッパ博士の部屋へようこそ」

カッパ博士の川のマメ知識

舟くんだり イカダくんだり 163

カヌーにチャレンジ 164

河原の石ころや流木でアートする 165

舟くんだり 166

舟くんだり 167

舟くんだり 168

舟くんだり 169

舟くんだり 170

舟くんだり 171

舟くんだり 172

舟くんだり 173

舟くんだり 174

第三室 「科学の部屋へようこそ」

川のなりたち

水は循環している 99

川は山をけずり、土を運び、平野をつくった 102

川にはなわばりがある 104

川がつくった地形(河岸段丘・扇状地・三角洲) 106

水をたくわえる(天然のダムと人工のダム) 108

日本の川と大陸の川 110

川のすがた/上流部のようす 112

川のすがた/中流部のようす 114

川のすがた/下流部のようす 116

第一室

「民話の部屋へようこそ」

川から生まれたお話

この部屋には、「昔むかし……」ではじまるお話があつめられています。

それらのお話には、かならず川がでてきます。

その川があつたからこそ生まれた、お話ばかりです。

きみが知っている川があるかもしれません。知らない川もあるでしょう。

その、どの川も、いまでも流れつづけている川なのです。

大昔から、人々は、川のめぐみをうけてくらしてきました。

川は水や魚をあたえてくれました。川の道にもなってくれました。

そのうえ、人々のこのころの、なぐさめにもなってくれました。

しかし、川は、おだやかなときはかりではありません。

ときには、あばれ川となつて、人々をくるしめることもあるのです。

お話のひとつひとつに、そんな川とむきあつてきた、人々のくらしぶりを知ることができます。

ひとつのお話ごとに、そのお話にでてくる川について解説がついています。

ほんとうの川とその川にまつわるお話を、

てらしあわせて、そうぞうしてみると、おもしろいかもかもしれませんね。

八岐の大蛇

やまたのおろち



神代のむかし、スサノオノミコト という神さまがいました。スサノオは気があらく、らんぼう者たというので、神さまの世界からおいだされ、出雲の国、ヒノ川（愛伊川）のほとりにおりてきました。スサノオが草をかきわけ川のはとりをあるいていますと、なにやら川上から流れてきます。よく見ると、それは若者でした。「うむ、川上には人が住んでいるにちがいない」スサノオが川をさかのぼっていきますと、おもったとおり、人家がありません。家のなかでは、美しい娘をききんで、年老いた夫婦がしくしく泣いています。スサノオはふしぎにおもったはずねました。「これ、おまえたちは、なにがそんなに悲しくて、泣いているのか」「はい、じつは毎年、この山おくから、ヤマタノオロチがやってきては、大あはれをします。八人いた娘たちはそのつど食べられて、いまはこの末娘ひとりになってしまいました。今年もそろそろオロチがやってくる季節です。この娘も食べられてしまうのかとおもうと、悲しくて泣けてくるのです」

「それはきのどくなことだ、なんとか助けてやりたいが、いったい、そのヤマタノオロチとは、どんな怪物なのだ」

「はい、それはそれは、おそろしいオロチです。目はホオズキのように赤く、一つの身に八つの頭と八つの尾をもっています。その身にはスギやヒノキがしげりコケまではえていて、腹は赤く血ただれています」

「うむ……」さすがのスサノオも考えこんでしまいました。が、

「よいか、それほどのオロチ、かんたんに退治できない、わたしによい考えがある、わたしのいうとおりにするのだ」

スサノオは、夫婦にオロチ退治の、じゃんびを、命じました。



「オロチがやってくるところに、垣を、はりのぐらせよ。垣には、八つの門をつくり、それぞれの門のなかにはタルをおき、つよい酒をいれておくのだ」

夫婦は、いわれたとおりにしました。

そしてスサノオは、オロチ退治がすめば、美しい娘を、およめさんにもらうことをやくそくしました。

しばらくしたある日のこと、

空いちのんに黒い雲がたれこめて、山おくてビカビクツといはずまがはしり、ゴロゴロと雷がなりはじめました。あたりは夜のように暗くなりました。「うむっ、そろそろやってくるな」

はげしい雨がふきつけ、地のそこらわきだすような、ぶきみなひびきが、八つの谷、八つの丘をゆるがせながら山からおりてきます。

「さあこいつ、ヤマタノオロチ」

スサノオは身がまえました。

するといキバをむきだし、八つのかま首をくねらせながら、ヤマタノオロチは、どんとんと近づいてきました。

しかし、そこには、がっしりと垣がはりめぐらされています。オロチは、八つの門をくぐりぬけ、八つのタルをみつけると、八つの首をタルにつっこんできました。

そして、その身のたうちまわらせながら、がぶがぶと酒を飲みました。あれくるっていた、さしものオロチも、そのうちに酔ってきます。しだいに、動きがにぶくなって、とうとう寝てしまいました。

「いまだっ」

スサノオは、つるぎをぬくとオロチにとびかかり、すたすたに切りよきました。オロチは断末魔のさけびをあげながら、死にました。

さうしてオロチは退治されましたが、

スサノオの流れた血は、切られたオロチの血で真っ赤にまじりました。助けられた娘の名はクシナダヒメといました。

スサノオノミコトはクシナダヒメと結婚し、出雲地方の王になって「くに」をおさめました。



やまたの大蛇とは、 じつは、あばれ川のことだった

このお話は、古事記や日本書紀にでてくる神話です。ヤマタノオロチが川だったなんて、いったい、どういうことでしょうか。川全体のすがたを見てもみましょう。

上流で分れる支流が尾、一本になって、くねくね流れる部分が胴体、そして、デルタで分れる派川が首、と考えると、ヤマタノオロチそっくりです。ヤマタノオロチだといわれる斐伊川の現在の長さは153km。

島根県東部、船通山から流れでると、いくつもの支流をあつめながら、杉など木々のおいしげな深い谷間をぬけ、出雲平野をつらぬき、宍道湖にそそいでいます（1639年以前は日本海にそそいでいました）。

川の上流部は、砂鉄の産地です。昔から、この砂鉄は「たたら製鉄」といって、日本刀の材料にもなっていました。砂を流し砂鉄を沈降させてとるカシナ流しによって、川床が砂鉄をふくんだ砂で赤さびた色になります。切られたヤマタノオロチの尾からツルギがでてきたり、その血で川が赤くそ

まったり、まさに、斐伊川はオロチそのものです。美しい娘の名は、クシナダヒメ。漢字にすると、奇稲田姫（日本書紀）と書きます。つまり娘とは田のことでした。

斐伊川の洪水が毎年のようにおこり、たんせいこめて育ててきた稲田を流し去っていたのでした。

そこで、スサノオノミコトは策をたてました。まず垣をめぐらしました。これは堤防だと考えられています。八つの門はセキ、八つのタルはため池で、洪水（ヤマタノオロチ）をここにみちびいて、勢いをやわらげたのだと考えられています。

切りさいた尾からツルギがでてきましたが、川の上流で刀の材料になる砂鉄がとれることを考えると、なるほどとうなずけます。

さて、スサノオノミコトはクシナダヒメと結婚します。これは、治水に成功し、地域の人々の尊敬をあつめ、この地を治めるようになったことを意味しているのでしょうか。水害に悩めつけられながらも、洪水と戦い、土地を守ってきた古代の人々のすがたが、かんじとれるお話でした。



出典「出雲古知今」
付図編 葦野大社

つんぶく達磨 だるま



むかし、

ツンブ ツンブ

ツンブク ツンブク

たつたひとりで、最上川を流れていった だるまさんのおはなし。

蔵王温泉から、しぶくて赤い水が、ぼこぼこ 流れてくる川が、
ほら、須川だ。

須川の水は、飲み水にならないうばかりか、田んぼにかけると、イネがちょりちょりにかれてしまうし、さかな一匹、むしけら一匹、生きておれない しまった川よ。

その川のほとりに、「おだるまのサクラ」とよばれる大きなサクラの木が あった。

このそばに、お寺があつてな、お庭の小さなお堂に、木のだるまが まつられてあつたけど。

あつい夏がくるとな、はだかの わらしどもがやってきて、
おしょうさんを みつけると 大声でたのんだ。

「おっさま、おっさま、だるまさん かしてけれ」

「おう
人のいい おしょうさんのへんじを まちかねたように、わらしどもはお堂から だるまをかつぎだし、「わっしょい わっしょい」と川つぶちまて 運んでいった。

ドップーン

ジャブラン ジャブラン

なげられた だるまき おいかけて わらしどもも 飛びこんだ。

須川の水はしぶいから 目をあけると びりびりしたども、わらしどもには、川ほどいい遊び場は ほかに なかった。

わらしどもは、「一日じゅう だるまを 遊んだ」
だるまも、「一日じゅう わらしどもと 遊んだ」。

夕方になって、お日さまが西の山に沈み、川のおもてが、さあっと暗くなると、この日にかぎり、わらしどもは だるまのことなど すっかり わすれて かえってしまった。

のこされた だるまは、月夜のきしえて ひとりぼっち。

ツンブク ツンブク

ういたり しずんだり していったつが、やがて、須川のまんなかき流ればじめた。

ツンブク ツンブク

いつのまにか 須川は 広い最上川に流れでていた。

だるまは 最上川の流れにのつて、ながい川の旅をした。

ツンブク ツンブク

もう目のまえには、海が見えていたつが、ちやうど そこに通るかかったのは、近くの村の名主さん。

ツンブク ツンブク

「ありやあ、だるまさんだ、もったいねえこと」

名主さんは、だるまをひろいあげて もつてかえると、ていねいに床の間にまつて、まいにち おがんでいたつが、名主さんの家では、だれひとり、ほらいたひとつ おこさないようになった。

だるまのうわさは、酒田じゅうのひょうばんになり、近くの村からも おまいりにくる人が、名主さんの家に来るほどになった。

ところが、ある晩のことよ。

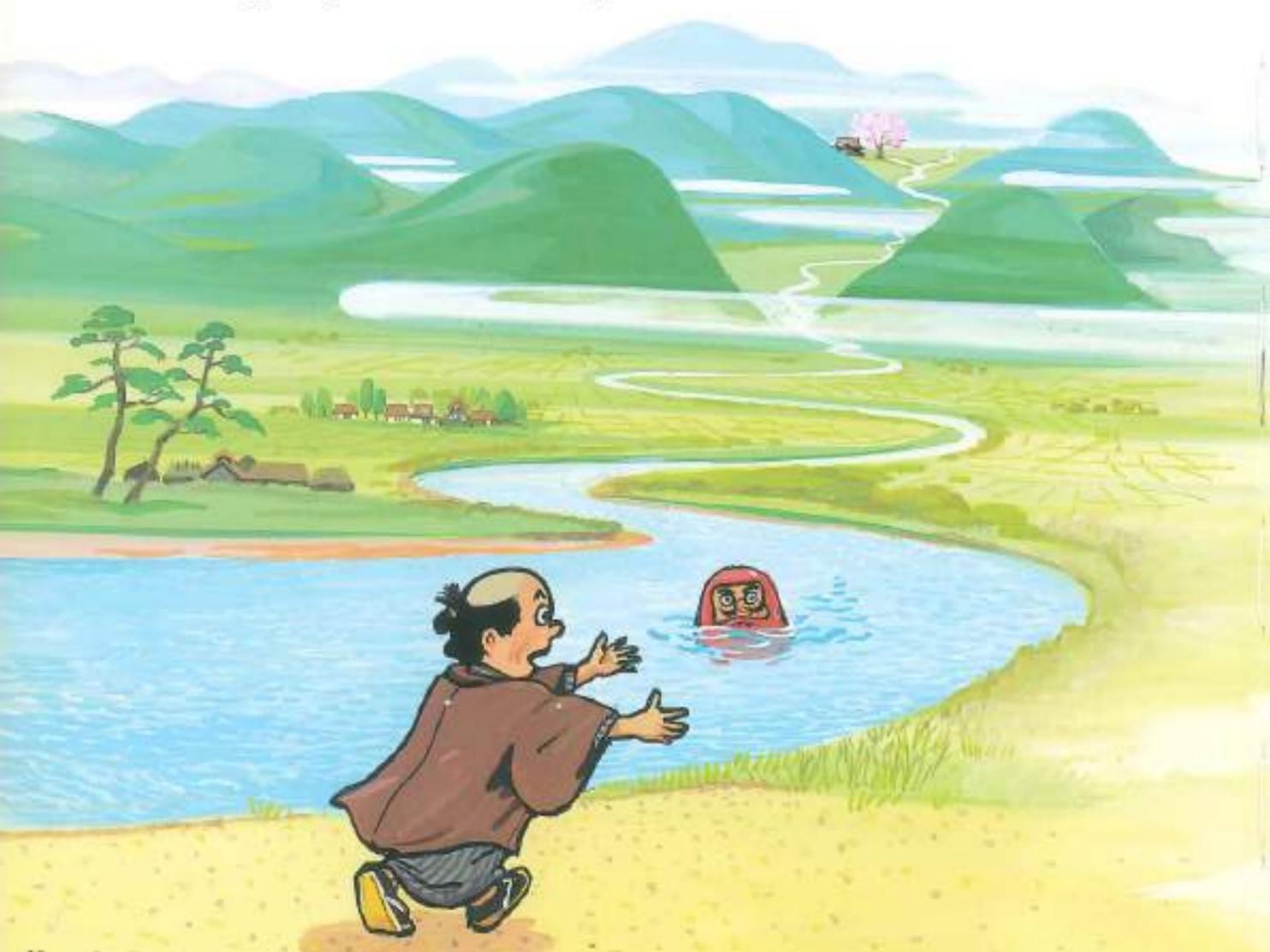
だるまが、名主さんのゆめにてきて、たのむんだつけど。

ツンブク ツンブク

「名主さん、わしをもとの村につれていってくれ、最上川をさかのぼつてゆくと、須川が流れこんでいる、その須川を少しさかのぼると、大きなサクラの木があつてな、そこがわしの村じゃ、いま 村では、はやりやま

いがでて、こまておるのじゃ、早く わしをつれていってくれ
はつと目がさめた名主さん、

「はてさて、ふしぎなことじゃ」
と、目をこすつた。





山形県中山町の酒田に伝わるこの民話は、最上川なくしては かなたない、
 こころあたたまるお話です。
 昔、中山から酒田までいくには、
 けわしい山道をこえ、川ぞいの荒れ地をとおし、よその領主がおさめる土地
 をとおしてらわなければ、いきつけない、きびしい道のりでした。
 交流もなく遠くはなれてくらす人たちが、川によって幸せをわからず、こ
 ころをかよわせあつたのです。なんとほほえましい、すてきなお話でしょう。

だるまがとおった川の道 最上川

昔から最上川は、山形の産業をささえる大切な川の道でした。
 内陸部でとれたお米や、京の都へおくられて高価な染料になった紅花、きも
 のに使われる繊維アオソなどが、川舟で最上川をくだり酒田へ運ばれ、酒田
 で積みかえられて、海路で京の都や江戸へ向けて、運ばれていきました。
 最上川は、現在では 想像もつかないほどの、多くの舟が、のぼりくだりし
 た川の道でした。
 最上川をたずね、遠野寺ぞいの須川に、たちよってみると、川床の石は酸性
 の水で赤さび色になっていました。この須川のしよっぱい水も、最上川にで
 ると、うすめられ、かき捨てられています。それほど最上川は水質ゆたか
 な川なのです。そのうえ、流れはゆたかたっています。
 だからこそ、舟運がさかえたのでしょう。
 この最上川が、現在、日本の三大急流に数えられているのは不思議なくら
 いです。上流の長井から河口の酒田まで、とちゅうの山間、いくらか流れ
 が速まるもの、けつして、さかまく流れにであうことはありません。
 最上川は、だるまさまが ツンブク ツンブク と旅をするのには、びつた
 りの川だったので。



とおっしゃった。それをきいた村の人たちは、さっそく だるまさま須川に
 運んでいって、流したと。
 ツンブク ツンブク
 ツンブク ツンブク
 だるまは、また三日三晩かけて酒田へと流れていったと。
 だるまさまま まちわびていた酒田の人たちは、おおよろこびしたと。
 それからというものの、最上川で、だるまを見かけると、村の人たちは
 「あれあれ、だるまさまが また 酒田へおでかけた」
 といって、酒田の はやりやまいが早くおさまるようにと、 だるまさま
 を見おくっておったと。
 こうして、だるまは ツンブク ツンブクと 最上川を くだったり
 のぼったりして、二つの村を、たすけたと。

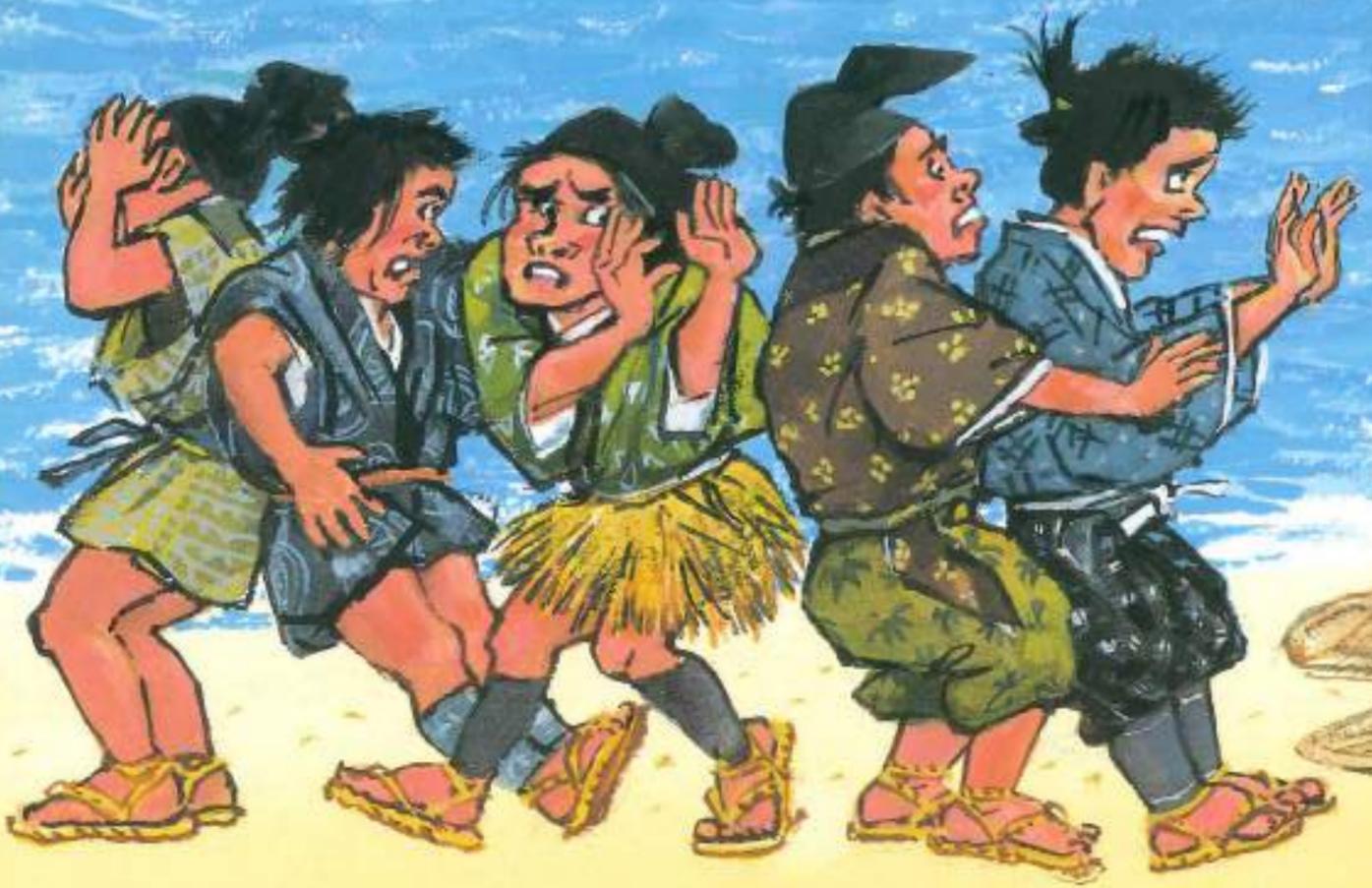


名主どんは、つぎの晩も、おなじゆめを見た。
 「だるまさま、それほどおっしゃるならば、もとの村におつれしますが、
 それでもだるまさま、もし、わしらの村に、はやりやまいが来たときは、
 もどってきてくださいますか」
 だるまは、こっくりとうなずいたと。
 よろこんだ名主どんは、さっそく、旅したくをして、だるまさませおうと、
 なん日も、なん日もあるいて、もとの村をたずねた。
 最上川をさかのぼり、須川をさかのぼって、やっとのこと、サクラの
 花がバアツとさいている村にたどりついた名主どんは、おおよろこびで
 もとどおり、お寺のお堂に、だるまをおさめた。
 村の人たちは、もつとよろこんで、「ありがたいこと」とこぞっておまいり
 にくたづけが、ありや、ありや、ふしぎ。
 だるまさまをおがんだら、だれもかれも、はやりやまいなど、けろりと
 なおってしまったとは。
 そのうちに村の人たちは、はやりやまいのことなど、すっかりわすれて
 しまった。
 そんなある日、おしょうさんの ゆめのなかで、だるまが
 「どうも酒田に、はやりやまいがでたらしい、ちよつとなおしてくるから
 わしを川に流してくれ」



おうせ
ちよらじや

王瀬の長者



むかし、沼金の王瀬(いまの新潟市)といわれたあたりに、たいそう金持ちの長者が住んでおった。

そこは、信濃川が海にそそぐあたりで、川には、何艘もの舟がうかび、あたりいったいは田んぼや沼が、どこまでも広がってあって、どれも、ぜんぶ長者のものだった。

そこらの百姓や漁師も、みんな長者につかわれておったと。秋がきて、信濃川をサケのぼりはじめると、長者は漁師たちをさしずしてサケをとらせる。

日に百匹もの、りっぱなサケをとれたそうなの。それを、とおくまで運ばせて、高い値で売らせた。

長者はもうけるばかり、まい日がほくほく顔だったと。ところが、一年に一度だけ、長者のきげんがわるくなる日があった。

それは、十一月十五日、サケの大群が川にやってくる日だった。ところが、この日にかぎって、漁師たちはこぞってしごとを休む。

長者にとって、これほど、腹のたつことはなかったと。漁師たちが、休むのには、わけがあった。

たしかに、サケがたくさんぼつてくる日だったが、この日ばかりは、いつもと、じじょうがらかった。

大介、小介と名のるサケの夫婦が、大群をしたがえて、「大介、小介、いまのぼるうっ」

とさけびながら、信濃川をさかのぼり、信州(長野県)の戸隠山へおまいりにいく日だと、伝えられておったからだ。

大介、小介は、三メートルあまりもある大きなサケで、銀色のうろこまさらめかしておよすがたは、それはそれは、みごとなものだったそうなの。漁師たちは、そのありさまをうやまつて、この日ばかりは、けっして網をうつことはしなかったのだと。

よくぼりな長者には、これがなつとくできない。夏がすぎ、秋がくると、長者はこの日のことまで頭がいっぱいになってくる。「毎年、毎年、がまんしてきたが、もう、がまんできん」

長者は、ある日とつぜん、漁師たちをあつめて、こういって、「今年の十一月十五日ばかりは、しごとを休んではなんね。網をいれて、なんとしても、あの大介、小介をつかまえるのじゃ」

漁師たちは、おったまげた。「そげんことすりゃ、ぼちがあたる」「たたりがおっかなすけ(こわいから)そればかりは、ゆるしてくらっしえ」

みんなは、口ぐちにたのんだども、長者は、「わしのいうこと、きかれんやつは、この土地にはおかんすけ、どこへでもいげや」

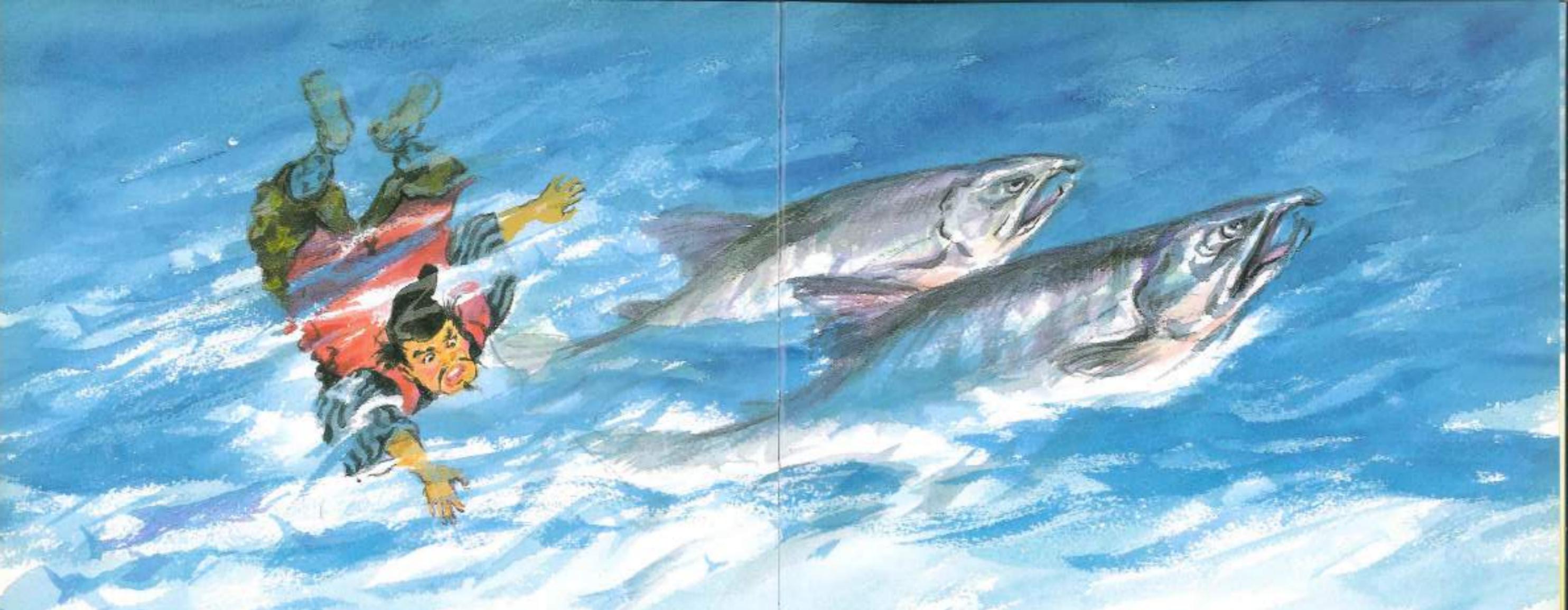
とどなりつけたんだと。その夜のこと、気分をよくしてすっかりねこんだ長者の耳もとで、「長者どの、長者どの」とよぶ声がしたんだと。

ほつとしておきあがった長者のまくらもとに、二匹の大きなサケが、ならんでおって、「わたしたちをつかまえるなんて、おねがいだから、やめてください」とたのむんだと。朝がたまに三度もたのみにきたども、長者はそのねがいをはねつけたそうなの。

そして、とうとう十一月十五日がやってきた。長者は、朝からほりきって、「サケの、大介、小介がなんぞい、たかがサケじゃ、これがることはなんもない。さ、はよう網うてい、網うてい」とめいれいした。

長者にさからえない漁師たちは、しかたなく網をうちはじめた。ところが、何度、網をうっても一匹のサケもかからない。「もつとしっかり網をうてい、しっかりうてい」

長者は声をからして、わめきちらすが、どうしたわけか、小魚一匹かからなかったと。漁師たちも、くたくたになつて、



「なんぼ綱うつてもだめでがんす、たたりがおこらんうちに家にかえらしてける」

とにげるようにかえってしまったそう。いつのまにか日ほしずみ、あたりはすっかり暗くなっておった。

しかたなく長者も家にかえったが、くやしくてねむれない。真夜中までひとり酒をがぶがぶのんで、たおれるように、ねどこにはいったと。

それからどれくらいたったか、ぞくぞくするさむさで長者が目をおけると、まくらもとに、かがやくような銀色の髪をなびかせた、じいさまとばあさまが、こわい目をしてにらんでおったと。

「ば、なんぞい、お、おめえたちは」
長者が、ふるえ声でさういふと、
「きょうは、なんともごくろうじゃったのう、わたしたちののみもきかず、綱をうつとはなさけない」

と、いいのこすと、ふたりのすがたは、すうっと、きえてしまったそう。そして、しばらくすると、川のほうで、バシヤツと水に飛びこむ音がきこえてきたと。

「あつ、あれは、大介、小介」
とおもったが、長者は声をだそうにも、なぜか声がでず、しだいに気がとおくなつて、暗い穴におちていくようだったと。

と、そのときだった。
「大介、小介、いまのぼるうつ」
とさけぶ声が信濃川にひびきわたり、
川面がふくれあがるほどのサケの大群が、月のひかりにかがやきながら、ぞくぞくと川をのぼっていったそう。

それからというもの、長者の家では不幸がつづき、稲ほみのらず、魚もとれない。長者も、とうとう病氣になって、くるしみつづけて死んだそう。

このお話の舞台 信濃川



この長者話は、新潟県に伝わる民話です。信濃川と、そこでくらしをたてていた人々のお話です。大介、小介のような3mもある大鮭なんて、現実にはいるわけがありませんが、産卵のために川をさかのぼる鮭を、むやみにとらない、という漁師たちの知恵や、そんな自然のいとなみを馬鹿にしてバチがあたる長者などから、川や自然を大切にしていた人々のすがたを感じることが出来ます。

さて、お話にでてくる信濃川は、本川の長さ367km、日本一長い川です。水の豊富さでも日本一です。ちよっと、地図を見てください。

この川は、北アルプスや八ヶ岳など、冬には雪につつまれる高い山やまから流れだしています。また、長野も越後の山やまも豪雪地帯です。これらの雪は暖かくなつてとけだすまで、大地にしっかりとどまって、天然のダムの役目をしてくれます。

つまり信濃川は、日本一大きなダムをもっているといえますね。

信濃川の水が豊富な理由はここにあるのです。

しかし、水の量が多い川ということは、洪水をおこしやすい川でもあったわけ。長い年月の間に信濃川がおこした洪水によって運ばれてきた土砂が、つりつもつてできたのが新潟平野です。

ところで、お話の舞台の新潟市あたりは、江戸時代はまだ海だったそうです。そうだとすると、このお話はいつごろつくられたのでしょうか。

また、この大介、小介の伝説は、山形県にもあって、同じく11月15日には鮭漁を休むといういい伝えがあるそうです。



河津の壱かづは

むかし、むかし、伊豆にある河津川が、いまよりずっと深かったところ、なかでも、極足寺のうらもんあたりは、ひとときわ深い淵になっていて、そこに、たいへんいたずらなカッパがすんでおりました。

「河へ行くときは、きをつけてろ。カッパに足をひっぱられるぞ。」

「川ぞいから、手をのぼして、こどもの尻子玉をひきぬくぞうだ。」

そんなうわさが、だんだん大きくなって、田んぼに水をひく、せきがこわれたときも、畑のきゅうりが、あらされたときも、わるいことがおこると、なんでも、村の人たちは、ぜんぶ、カッパのせいだとおもうようになりました。

「あのカッパさえいなければ、河津の村ほどいいところはないのにな。」と村の人たちは話しあっておりました。

ある年の夏、お堂だけだった極足寺を、りっぱな寺にたてかえることになり、村の人たちも、みんなあつまって、てつだっておりました。

大きな木を馬にひかせて運ぶ人、その木をけする人、みんな、汗びっしょりになってはたらきました。

空が夕やけにそまるころ、その日のしごとがおわります。

「やれやれ、きょうもぶじに、しごとがすんでよかった。さあ、汗をおとりに川へいこうや。」

そういって、じぶんの馬をひきつけた村の人たちは、そろそろと河原へやってきて、水浴びをはじめました。

河津川の水は、夏でもつめたくて、人も馬も、とてももちよさそうです。

そのときでした。とつぜん「ヒヒーン ヒヒーン」と一頭の馬がとびあがって、きゅうにあばれだしました。



まわりの人たちがびくびくして馬のほうをみると、その馬のしっぽに黒い、へんなものが、しがみついています。

「ややや、見ろや、ありや、カッパじゃないか。」

「ほんとだ、カッパだ、カッパだ。」

「いたずらカッパにちがいない、にがすな、やつつける。」

みんなは、ぼうや石ころをもって、カッパめがけて走りだしました。おどろいたのはカッパです。あわてて川へ飛びこもうとしましたが、馬にふりとばされて、川とは、ほんたいのほうに、なげだされてしまいました。水の中では、つよいカッパも、りくのうえでは、にんげんにかいません。「ヒューイ、ヒューイ」となきけなく、さけびながら、ひっしりになって、にげまわっています。

「まあえ、ぶつこうしてやる」そんな声まできこえます。

「ヒューイ、ヒューイ」やつとのことで、カッパは極足寺のうらまで、にげてきましたが、そこはいきどまりでした。もうにげ場がありません。カッパはしかたなく、そこにあつた、いどに、ドボンと、飛びこみました。

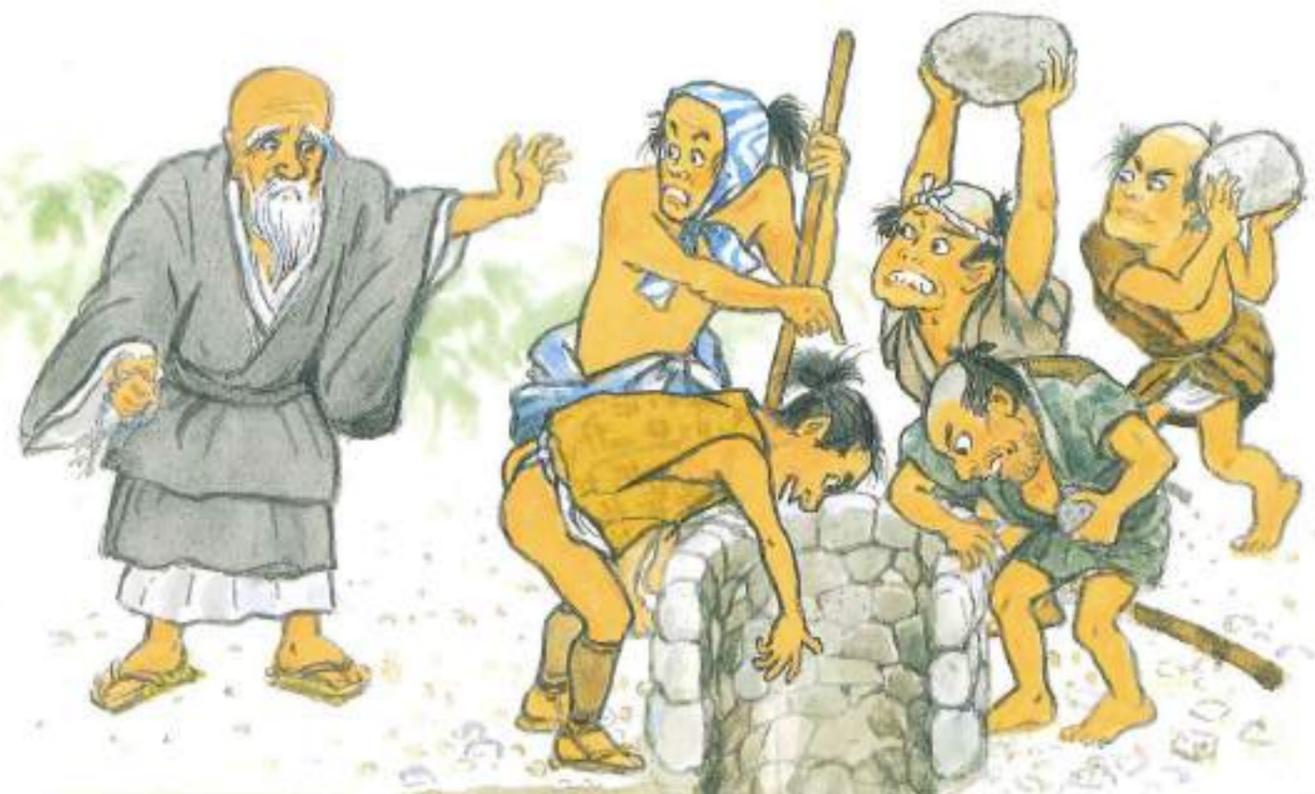
「やつ、カッパめ、いどに飛びこんだぞ。」

「ほかなやつだ、もう、にげられねえ、大きな石をぶちこんで、おしつぶしてやるわ。」

いどきとりかこんだ人たちは大さわぎです。

そこへ、さわぎをききつけた、おしょうさんが、寺から、でてきました。

「これこれ、みんな、おちつきなされ、いまは寺きたる、だいじなときじゃ。たとえ、わるいカッパでも、いきものをころすことはゆるしませんぞ。どつじゃ、ここはひとつ、この、おしょうに、まかせなさい。」



そんなけいしている、おしょうさんに、そういわれては、しかたがありません。みんなは、すこすこと、かえっていきましました。

おしょうさんは、カッパを、いどからだしてやりました。

カッパは、まだぶるぶる、ふるえながら、ふあんそうに、おしょうさんを見あげています。

「これ、カッパ、おまえは、たいそういたずら者のようじゃな、いたずらも度をすぎると、じぶんのせいではないことまで、おまえのつみにされるのじゃ。ここにいては、また、だれか見つかって、ひどいめに、あわされるじゃろう、どこかへいって、こころをいれかえるがよい。これからは、けっして、いたずらなんか、するでないぞ。」

そういって、カッパをながしてやりました。

その夜のことです。おしょうさんのねているへやの雨戸を、とんとんとんとんと、たたくものがいます。

「このよふけに、だれじゃ。」

なたとり淵ぶち



むかし、高千穂とよばれる山間の村に、小太郎という百姓が住んでおった。ある日、小太郎は田原川のへりて、たきぎにする木を、切っておったが、どうした、はずみか、なたの刃が、スポンとぬけて、川におちてしまった。「ヤヤヤ、なんてこったい」

あわてて川ぞこぎのぞくと、なたの刃は、すんだ水のなかで、キラキラとひかっている。せまい沢だし、浅いから、とるのほかんたんだ。

「やれやれ」

小太郎はあんしんして、ジャブジャブと水のなかへはいると、こしきかがめ、キラキラひかっている、なたの刃を、とろうとした。

ところが、手がふれようとしたとたん、なたの刃は、フワリというて、2メートル近くも、川下に流れてとまった。

「ヤヤヤヤ、こりやまた、どうしたこったい」

鉄でできている、おもい、なたの刃が、木の葉のように、フワリというて流れるなんて、そんなばかなことが、あるわけがない。

小太郎は目をバチクリさせながら、なたの刃がとまったところまで、ジャブジャブあるき、こんどはしっかりとたしかめて、手をのぼした。

「ヤヤヤヤ、どうなつとる入」

なたの刃は、また、小太郎の手をすするりとぬけ、フワリと川下に流れてとまった。

「なたの刃、まてえ」

小太郎は、むきになって、おいかけはじめた。しかし、そのつと、なたの刃は、フワリ、フワリ、とにげるように流れていく。

いつのまにか、田原川は五ヶ瀬川に流れて、川はぼも大きくなってきたが、小太郎はあきらめずに、なたの刃をおいかけていった。

やがて川は大きな滝になった。滝の下は竜宮淵とよばれる、そこなしの淵で、村びとも、めつたに、近よらないところじゃった。

なたの刃は、その淵に、ボシャーンとおちて、見えなくなつてしまった。

「ええい、ここまできたんじゃ、なにがなんでも、さがしてやるわい」

小太郎は、きものをぬぎすてると、さんぶと竜宮淵へ飛びこんでいった。



その夜、おそくなくても、かえらない小太郎さがして、村では、おおよわぎになった。おかみさんのたのみで、村じゅうが総出で、山から、川から、くまなくさがしたが、見つからない。あくる日も、そのあくる日も、なん日も、なん日もさがしたが、見つからない。

とうとう、おかみさんもあきらめて、はくなく、そうしきをすませた。一年たち、二年たつても、やっぱり小太郎はかえつてこなかった。

やがて、三年めの命日がやつてきた。小太郎の家では、お坊さんをよび、村の人たちもあつまつて、お経をあげてもらい、小太郎をなつかしんでおつた。えんがわからは、のどかな山に、はさまれた、ほそながい田んぼと、田原川のくぼみが見える。そこ的小みちを、白い馬にのつただれかが、こちらへ、むかつて、のんびりとやってくるのが見えた。

「こちらへんでは、見たこともない、りっぱな馬じゃが、だれかいの」

みんなは、えんがわにあつまつて、近づくと馬を見ておつたが、しだいに、目をまんまるに見ひらいて、口をポカンとあけ、あつげにとられてしまった。

「お、おまえさんは……」

おかみさんは、やつとのこと、さういうと、こしきめかしてしもうた。馬にのつていたのは、小太郎じゃった。小太郎もおどろいたようすできた。

「どうしたんじゃ、おおせい人があつまつて、なにが、あつたのかいの」

「なにをいつとるのじゃ。おまえこそ、いままでなにをしておつた」

「いやあ、それがの、おら、おとした、なたの刃をおいかけて、竜宮淵にもぐつたんじゃ、すると、なんともりっぱな竜宮についた。そこで、さんざん、もてなされて、ついつい三日も、遊んでしもうた。かえるときに二つ

の玉と、馬をくれたんじゃ」





「ひえっ、そりゃ おどろきじゃ。だが おらは うそはついてないぞ」
 小太郎は、そのしょうこだといって、うつくしくかがやく二つの玉をだして見せた。

「こちらが、日どり玉というてな、日でりてこまったとき 雨をふらせてくれ、こつちのほうは 水どり玉というて 大雨でこまったとき 雨を止めてくれるぞうじゃ」

この世のものとはおもえない、うつくしい玉を見て みんなもやっと小太郎の話を しんじるようになった。

しかし、なん年かたつうち、村人たちは玉のことなど わすれてしまった。そんなある年、春さきから日でりがつづき、たのみの田原川の水もすっかり干上がった。これでは田うえもできん。村人たちは 頭をかかえてなげいておった。小太郎は、いまこそ、日どり玉をためすときだ と、村人をあつめ、日どり玉をまつり、雨ごいのおいのりをはじめたんじゃ。

「日どり玉さま、どうかどうか 雨をふらせてくださりませえ」
 すると、みるみるうちに、からからの空があついでにおおわれて、あたりいちめんきつつきひょうりょうな雨がふりだした。

田加ほうるおされ、田原川も音をたてて流れはじめた。

村人たちは、「雨じゃ、雨じゃ」と、こおどりして大よろこびじゃ。

ところが、よろこんだのも、つかのままで、こまったことになってきた。

雨がやまないのじゃ。あくる日もあくる日も、雨はふりつづき、田原川は、いまにもあふれんばかりに、ごうごうとうなりはじめた。

「このままじゃ、洪水があふれ、家も田んぼも、流されるぞ」
 村びとは、しんばいで、しんばいで、おろおろするばかりじゃった。

「さあ、みんな、こんどは水どり玉をおがむばんじゃ」
 といって、小太郎は水どり玉をとりだして、みんなにもおがませた。

「水どり玉さま、どうかどうか 雨をやませてくださりませえ」
 すると、あれほどほげしくふっていた雨がびたりとやんで、みるみるうちに青空が広がり、かがやく日のひかりが高千穂の里いっぱいになりそぞいだんじや。



それからというもの、小太郎の村では、日でりにも大雨にも、こまることがなくなつて、二つの玉は村の大切な守り神になつた。

そして、小太郎が飛びこんだ竜宮淵は「なたとり淵」とよばれるようになったぞうじゃ。

神話の里の 小さな川、田原川



宮崎県、延岡市から五ヶ瀬川をさかのぼっていくと、神話のふるさと、高千穂町があります。山なみには、白い雲がたなびき、いかにも神話の世界にふさわしい雰囲気がただよっています。

「なたとり淵」の民話は、この高千穂を舞台にして生まれました。小太郎が、たきぎをとりでかけた田原川は、五ヶ瀬川の小さな支流、河内川にそそぐ、さらに小さな川でした。

この田原川にそつた細長い土地には、田畑がひらかれていました。田原川は、これらの田畑に水を運ぶ水路の役目をはたしていました。上流に湖や池をもたない、田原川の流ればささやかでしたが、がんじょうに増強された兩岸が、この川が雨によつてたちまち激しい流れになることを、ものがたっています。つまり田原川は、天気の影響をうけやすい川で、日照りがつづくと、枯れやすく、激しい雨にあうと、すぐにいっぱいになるすがたをしています。

昔、この地に住んでいたという小太郎や村のお百姓さんのくらしは、いまよりもはるかに天気の影響を受けたことでしょう。

日照りがつづけば、雨をふらせてくれる、日どり玉。
 雨がつづけば、お天気にしてくれる、水どり玉。

かなわぬ願いと知りつつも、「もし、こんな玉があったらなあ」と願わずにはいられたかった村びとたちの気持ちが、こんなお話をつくらせたのかもしれない。

ともあれ田原川は、地図にもその名がのらないほどの小さな川ですが、いまでもしっかりと役に立って流れ、やがて長さ106kmの五ヶ瀬川に合流し、多くの鮎を育て、どうとうと鮎をばって日向灘にそそいでいるのです。

ふえ ふきかわ かな ねいろ 笛吹川の悲しい昔の色

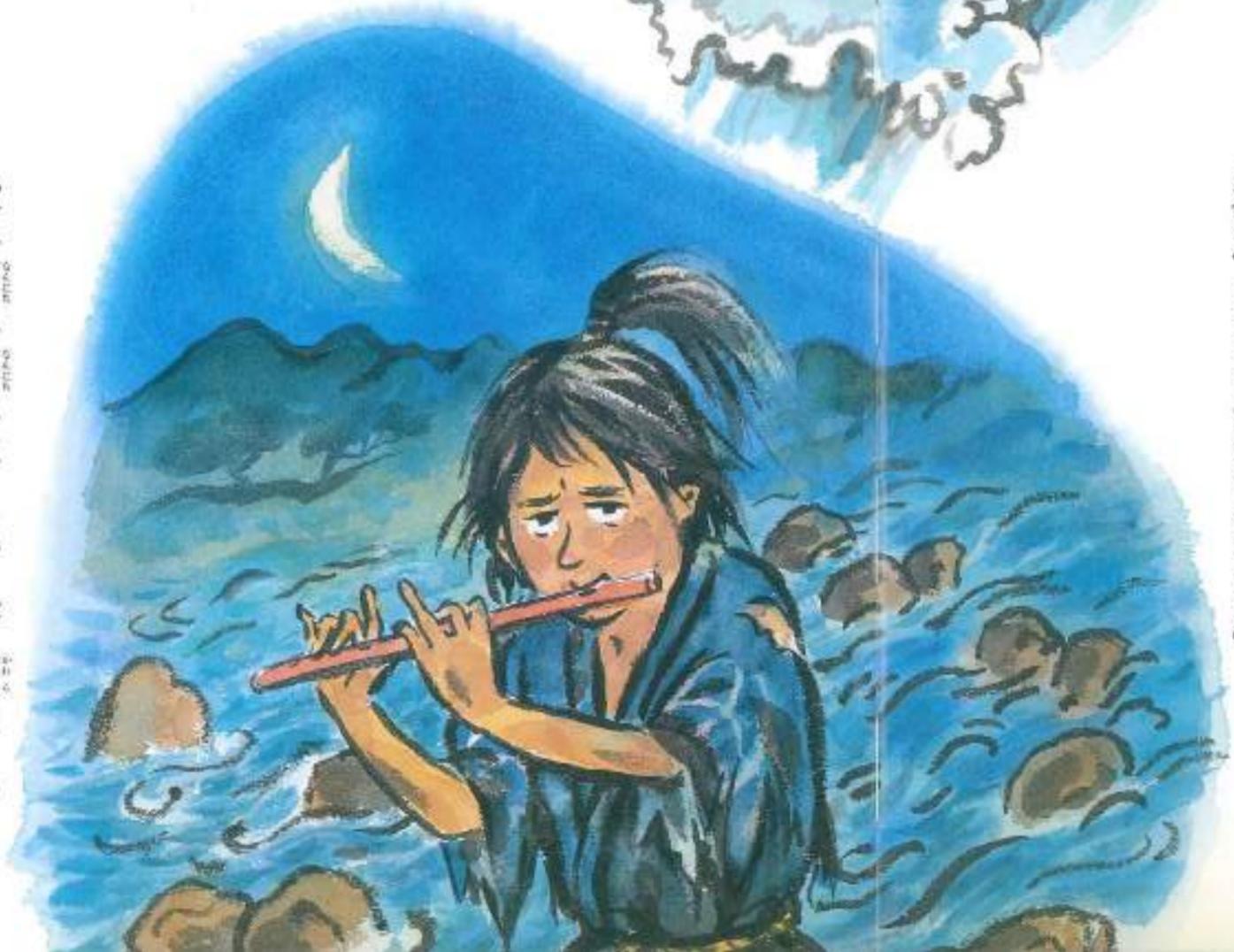
むかし、むかし
芹沢の里とよばれる山おくの村に、ごんざぶろう という わかものが、
お母さんと二人きりで住んでいました。
ごんざぶろうのお父さんは、みぶんの高い人でしたが、
たたかいにやぶれ、甲斐の国にのがれたという うわさがありました。
このお父さんをさがしている、ごんざぶろうとお母さんは、この地まで、
ようやく たどりつき、かり住まいをいている身でした。
二人が住む小さな家は、谷間の川ぞいにありました。
川は、甲斐の国を流れてくっついていましたから、二人はこの川にぞって、
お父さんをさがそうとしていたのです。



ふあんになって そとにでた ごんざぶろうは、びっくりして じぶんの
目をうたがいました。
ふりしきる雨のなか、しぶきをあげ あれくるって流れる川は、いままで
見たこともない おそろしい すがたをしていたのです。ふだんは つい
見とれてしまうほどの うつくしい川が、まるで きばをむいた リゅう
のように見えるではありませんか。
「お母さん、ここにははあぶない。もっと 高いところへ うつりまし
よう」
「高いところといっても、この雨のなか どこへいけば よいのでしょ
う」
二人が話しあっている そのときでした。
ドマドマと すさまじい音がして、滝のような水がおしよせてきたの
です。あつ というまに、家は こなごなにつぶされ、二人は、あれくる
う川に のみこまれてしまいました。
「オカアサンツ、オカアサンツ」
さかまく波に もまれながら、ごんざぶろうは ひっしりになって さけび
つつけましたが、お母さんのすがたは、もう どこにもありませんでした。
雨がやみ、きのうのあらしが うそのように 秋晴れの空が広がりました。
しかし、河原には、大きな石がごろごろして、まだ にごった水が
さわさわと はげしく流れています。
その河原を川下にむかって お母さんをさがしてまわる ごんざぶろうの
すがたが、いつまでも見えていました。

けれども、お父さんは、なかなか見つかりません。むなしく歳月がすぎて
いきます。お母さんは、もう すっかりつかれているようでした。
しかし、お母さんには、一つだけ、こころのなぐさめがありました。
それは、ごんざぶろうが、ふく 笛の音でした。
山の鳥でさえ、ききほれるほど。それは、それは、みごとなものでした。
お母さんは、ごんざぶろうの笛をきくのを、なにより たのしみにしてい
ました。ごんざぶろうも、お母さんのために、こころをこめて笛をふきま
した。
それに、お母さんをたすけて、よく はたらきました。
ごんざぶろうの、そんなすがたを、村の人たちは、おやこころの 見本
だと、ほめたたえておりました。

ある年のことでした。もう秋だというのに、台風がつきつきとやってきて、
まいにちのように、はげしい雨がふりつづきました。
ごんざぶろうの親子は、もうなんにしろ、家にとじこもったままでした。
家のそばを流れる川からは、ぶきみな水音が、ごうごうと ひびいてきま
す。
「お母さん、ちょっと 川のようにすき見えます」



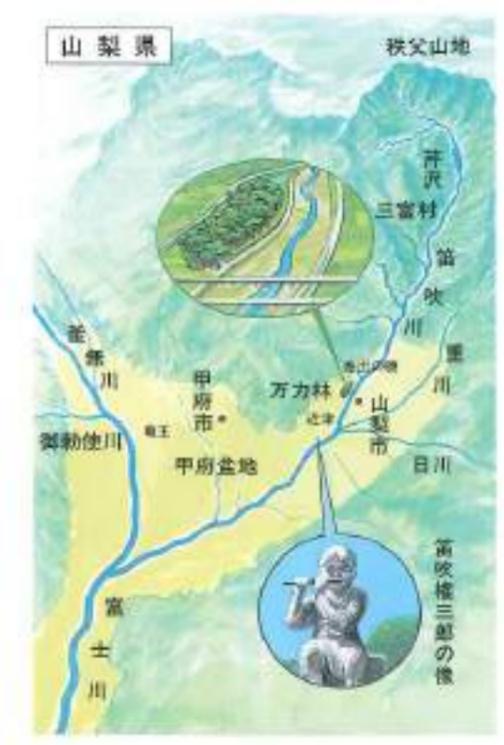
それから、何日も、何日も、すぎました。それでも河原にいくと、
かならず 岸辺をさまよう ごんざぶろうの、すがたがありました。
ごんざぶろうは、夜になって、あたりが見えなくなると、笛をふきました。
お母さんが、だいすきだった笛をふきました。
「ああ、今夜も、笛ふきごんざぶろうが、ふいている。あわれじゃのう」
ごんざぶろうの笛の音は、いつも、人々のなみだを、さそっておりました。
リリしかった、ごんざぶろうも、このころには、かみのけは
ボサボサにみだれ、きものは、ぼろぼろ、手も足もきすだらけ、すっかり
やつれはてていました。

そして、ある日、とつとつ、笛の音はびたりと、きこえなくなりまし
 川下の小松の河原で、ござぶろうが、かわりはてたすがたで、見つけら
 れたのは、それから、まもなくたつてのことでした。
 その手には、しっかりと笛がにぎられておりました。
 あわれんだ人たちは、ござぶろうのなきがらを、長慶寺に、てあつく
 ほうむってやりました。
 「もう、ござぶろうの笛をきくことは、できんもう」
 と、人々は、さびしく、はなしあっていました。
 ところが、それからしばらくして、夜になると、川の流れのなかから、
 笛の音が、かすかに、きこえてくるようになりました。
 それは、かなしいほど、うつくしい笛の音でした。
 それからというものは、だれいともなく、この川を、笛吹川、と、よぶよう
 になったそうです。



あばれ川が生んだ かなしいお話

ふだんはおだやかに流れている川も、ひとたび洪水をおこし、あばれ川にな
 ると、どんなにおそろしいかが、このお話からもわかるとおもいます。
 ござぶろう親子が住んでいた芹沢の里は、笛吹川上流の、深い山やまにつ
 つまれたV字形の谷間にあります。
 このような渓谷の川は、大雨でもふれば、たちまち水かさが増え、滝のよう
 な激しい流れになります。
 大昔から、笛吹川は、たびたび洪水をおこし、多くの土砂とともに甲府盆地
 に流れこんでは水害をおこしていました。
 川が山からぬけだしたあたり、山梨市の差出の磯はとくに洪水被害が多く、
 竜王、近津堤付近とともに甲州三大難所とおそれられたところでした。地団参
 照。ここには、武田信玄がきずいた万力林とよばれるりっぱな水害防備林や
 古い堤防がのこっています。
 このほかにも、甲府盆地には、釜無川、御勅使川など、いくすじもの、あば
 れ川が流れています。その各所に、人々がこつこつとつみかさねてきたりっ
 ぱな治水の業績がのこされています。
 笛吹川は、約55kmの流路をくだり、やがて釜無川に合流すると富士川とな
 り、駿河湾に流れこんでいます。
 お話のふるさとをたずね、笛吹川を源流までさかのぼってみました。
 こわいあばれ川のお話とはうらはらに、さかのぼればのぼるほど、この川は、
 おもわず息をのむほどの美しさでむかえてくれました。



人々をくるしめてきたあばれ川とはとても考えられないほど、清らかな水音
 に、ここまであらわれるようです。しかし、この澄んだ水が激流となり肥
 沃な土を運び、ゆたかな甲府盆地をつくったこともたしかなことです。
 だからこそ、人々は、この川のほとりに住み、くるしめられながらも川をに
 くまず、川とともにくらししてきたのでしょう。
 中流の川をいじつ、ござぶろうの像にたちよってみたら、だれがおいた
 のか、みかんが一つ、ぼつんと、そなえてありました。

おねじやだぬき

ずうっと むかし

三重県の、笠田新田にあったはなしや。

庄屋さんの大きな屋敷に、いたずらなふるダヌキが、すみついておったぞうや。ふるダヌキは、ぼけるのがとくいで、いつも いたずらばかりしておった。

里の家でな、トントントツ トントントツ とたくものがおるので、

「どなたかいの」

と 戸をあけると、でっかい大入道の顔が、戸口いっぱい に のぞいとる。

これには、だれでもびっくりするでえ。あわてて戸をしめるとな、かならずどこからか、

「おねじや、おねじや」

と、からかうように 小さい声が するんやと。

ふるダヌキのやつ、どうやら 庄屋さんの口ぐせの、

「おれじや、おれじや」

というのを、まね してらしいのよ。しかし そんなことくらい 村びと

には わかっていたので「おねじやダヌキ」とよんでバカにしておった。

ところで 笠田新田のお百姓のあいだにはこまったもんだいがあるてな、

これには庄屋さんも、ほとほと 頭をいためていたぞうや。

このへんの川は大きくないし、水が少なくてな、田んぼの水をとりあって、

村同士で、すぐけんかき はじめよるんじや。

川上の田が、たっぶり水をひくと、川下の田には、ちよっぴりしか水がま

わってこない。川下のお百姓もたっぶり水がほしいから、こっそり川上の

田のあぜを切って、自分の田に水を流しとる。

こんどは、水をとられた川上のお百姓がおこって、となりこむ。

日でりつづきて、水がれにでもなれば、それこそたいへんや。

ボウやウワなどをもちだして、なぐりあいまでおこるんや。

庄屋さんは、よりあいをひらいて、なんとか水争いをやめさせようとした

けど、いつも ののしりあいに なるだけやった。

あるとき、庄屋さんは、いいことをおもいついてな、

さっそく石やさんをよぶと、日影石というものをこさえさせたんや。

この日影石というのは、日時計みたいなもんでな、石の影のむきによって、

時間を きっちり二つに分けることができる。そして、こちらは川上、

こちらは川下ときめて、めいめいの時間のあいだだけ川から水をひけば、

公平になるとおもったんや。

「これで、もう争いもなくなるでえ」

庄屋さんは、だいまんぞくで村のおもだった者をあつめて、おいおいきす

ることにしたんや。その日ばかりは、川上のお百姓も、川下のお百姓も、

ここにこして庄屋さんの家にあつまってきた。

村の太兵衛もよばれておったが、家をでるのがおくれたもんで、ハアハア

ゆうて はしっておった。そしてちようと、庄屋やしきの、土べいのとこ

まできたときや。

とつぜん頭の上から、なまぬるい風が、ふううつと、ふいてきたもんで、

「なんやア」おもって、ひよいと見あげるとな、でっかい大入道が太兵衛

をにらんどるやないか。

「うわああ」ふいきつかれた太兵衛は、びっくりして近くの茶屋ににげこ

んだ。茶屋のおやじは、気がつよいし、けんきもんや。

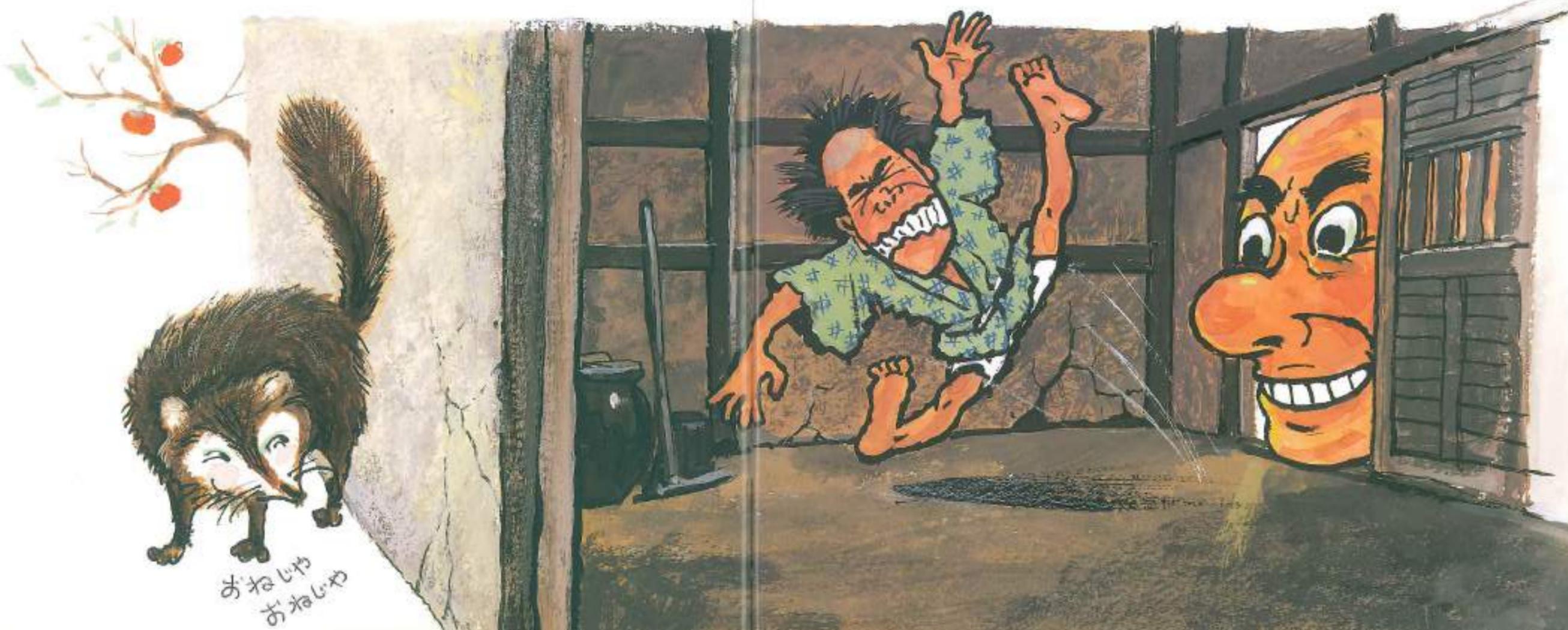
「そりゃア、おねじやダヌキにきまっとる。わしがおっぱらってやるから

ついてこいや」

てごろな、ボウをつかんだふたりが、もとの土べいのとこに、かけつけると、

さっきの大入道が、いねのたばをこわきにかかえて、まだ たつとった。

「こらあつ、大入道めつ、おまえの正体なぞ、とつくにわかっとるわい。ダヌキはタヌキらしく、あなぐらにでもすっこんでろつ」



おねじや
おねじや

ふたばやしきでなつと種のおたね

たなぐさ

ずうっと むかしのこと。
 播磨のくにを流れる市川の川上に、並深い村里があった。
 その年は、くる日も くる日も 白でりがつづき、もう 百日あまりも
 ひとつぶの雨もなく、田んぼも畑も からからに かわききっておった。
 「これじゃあ、この冬をこす食べ物もとれんわい」
 「それどころじゃないぞ、らい年まく 米や大豆のたねさえ のこせん、
 わしら百姓に たねがなけりゃ どうすりゃええんじや」
 村の百姓たちは とほうにくれておった。
 ある日のこと、ひとりのわかい百姓が たきぎをとりに 山へでかけた。
 ところが、この日にかぎって、あまりしごとが はかどらない。
 しらすしらすのうちに、どんどん山おくへと、はいつていった。
 と、そのとき、なんともいえぬ ふしぎな音を、耳にした。
 千ろ千ろ 千 千ろ千ろ 千チ 千ろ千ろ
 「はて、なんの音やろか、それにしても、こころよい音やなあ」
 近づくにつれ、音はしだいに大きくなった。
 千ろ千ろ シヤラシヤラ 千ろ千ろ ザワザワ
 のぞくと、それは、小さな川の音じゃった。
 「おうっ、水じゃ、水が流れとる」
 むちゅうになつて、流れのなかにはいると、
 「川じゃ 川じゃ」
 といながら、ますます山深く、はいつていった。
 すると、こんどは ゴゴゴウーッと、からだにひびくような音が
 きこえはじめた。



「水じゃ 水の音じゃ」
 ごつごつした岩のあいだを、音にひかって、もう 夢中で、のぼつていっ
 た。パツと目のまえが、ひらけたかとおもつと、みごとな滝が、しぶきを
 あげておった。

「ひええっ 百日いじょうも、雨がふつとらんのに、この滝の水は
 いったい、どうなつとらんや」

百姓は滝をこえ、さらに、おくへおくへと、のぼつていった。
 すると、こんどは大きな岩のまえにでた。

きがつくと、あたりは、いつのまにか深い森につつまれている。

「そろそろ、このへんが川のもとかいのう」
 すこしこころほそくなって、きよろきよろ見まわしていると、

とつぜん、

「これえっ おまえは、なにものじゃああ」
 と、あたまたの上から大きな声があつてきた。

「うひゃあああ」

百姓は、しんぞうが、とまるほど、びっくりした。

見ると、まっ白なヒゲをひかせた、せの高い老人が、大岩のうえに、
 うっすらとかがやいて、たつておった。

「お、おらは、ふもとの百姓で、わるいことはなにもしりませんじや。
 どうぞ、どうか、おゆるしを」

「ふふふふ、そうか、よくわかった。なにそんなに、こわがらなくても
 よい。わしはこの谷川の川人じゃ。風のうわさによると、ふもとの里では
 水がのうて作物がかれ、らい年まくたねもないそうじゃが、ほんとうか」
 「はい、そのとおりでございます。らい年まくたねもなく、どうした
 らええもんか、みんな、とほうにくれておりますすじや」

「うむ、それは、きのどくなことじゃのう。よしよし、それでは、わしが
 ええことを、おしえてやろう」
 川人は、そういうと、ふとい一本のすぎの木をゆびさしながら、





「その木の根もとを掘るがよい、ていねいに掘るのじゃぞ」といって、クワをきしだした。

わかい百姓は、ただ、いわれるままに、掘りはじめたが、しばらく掘ると、ひらいたい石にぶつかった。

「その石をのけるのじゃ」

石をのけると、下から、ひとつつみの、小さなふくろがでてきた。

「それを、おまえにやろう。そのなかには、たねがはいってある、それを、まくがよい」

「ええつ、たね、たねでございませうか。これはこれは、なんとまあ、ありがたいいこと」

ふくろを、おしいただいて顔をあげると、もう、川人は、かすみのようになり、きえていて、あとには、深い森だけが、しずまりかえっておった。

「ありがたや、ありがたや」

わかい百姓は、掘ったあなを、もどおりうめると、もらったふくろを、しっかりとかかえて、村へかえった。

「さ、みんな、あつまってくれえ、おらの話をきいてくれやア」

なにごとかと、村びとたちは、あつまってきた。

そこできょうの、できごとを話しながら、ふくろをあけてみると、

米、麦、アワ、ヒエ、大豆、アズキ、キビ、の七つの、たねが、ひとにぎりずつ、はいっておった。

「ほう、みごとな、たねじゃのう」

「でも、ふくろはまだふくらんどうぞ、のこりを、わけてくれんかのう」

「おやっ、ほんとに、まだはいっとる、ええとも、ええとも」

わかい百姓は、のこっていた、たねを、つかみだして、わけてやった。

「おやおや、まだ、ふくらんどうわい、おらにもわけてくれんかのう」

「あれれ、ほんとじゃ、ええとも、ええとも」

そのようにして、つぎつぎと、たねをわけてやった。

ふしぎなことに、ふくろからは、とつても、とつても、つきることなく、たねが、でてきたんじや。

おかげで、あくる年は、どこのうちでも、ほうさくじやった。

谷間のはそながい村は、よその村がどんなに不作のときでも、けっして、たねにこまることにならなくなった。

それらしい、この村は七種村とよばれるようになって、わかい百姓が、

川上でであった流は「七種の流」、川人にあった山は「七種山」と

よばれるようになったぞうじや。

森が川を育て、川の水が作物を育てる

いまでも、七種山の森からわきだす水が、七種川になり、七種川となって兵庫県を流れる市川に合流しています。

お話が、そのまま、現在の山や滝、川の名前になっているなんて、楽しくなってしまうでしょう。

しかし、このお話、じつは、水不足に苦しむお百姓さんのくらしがかたがたかたがたしているのです。どんなにいっしょうけんめい、はたらいでも、水がなければ作物は育ちません。その水を運んでくれるのが川です。つまり、お百姓さ



んのくらしと川とは切りはなせないのです。それは、お話からも伝わってきます。

それに、もうひとつ、お話のなかで、わかい百姓が、川人にであった川の源流あたりは、深い森でした。

森の木は、ふたつ葉をしっかりと地中にためてくれます。その水が少しずつわきだして川になります。天気の良い日がつづいても、川の水がなくならないのは、この森のおかげなのです。

百姓が大きな木の根もとを掘ると、作物の種がでてきました。とつても、とつてもつきない種でした。

ひょっとして、このふしぎな種は、水のことかもしれませんね。

お話では、「仙人」のことを「川人」とあらわしていますが、ここに出てくる「川人」は川そのものである、といいたかったのかもしれない。

そんなことから、ちよつといわずら気分をだして、「種」を「水」におきかえ、このお話をふりかえってみるのも、おもしろいかもしれません。

「川人がおしえてくれた水のでどころは、木の下だった。その水は、つきることなく七種の里をうるおし、作物はゆたかにのびた」ということになりました。

しかし、いい伝えによると、昔、七草とよばれていたこの谷地に、ひとりのお坊さんが七種の穀物を植えたことから、七種に改名されたということです。

市川は、兵庫県のほぼ、まんなかを流れる長さ73kmの川で、朝来郡山から山やまにはさまれて、流れていきます。やがてはそながい盆地にでると福崎町があります。

ここで、支流の七種川と合流し播磨平野にでると、右岸側の距離域をとりかこむように流れ、ゆつたりと瀬戸内海にそそいでいました。

ひょうげまつり

三百年ほど、むかしのことです。高松の殿さまの家に、矢野平六というサムライが、おりました。平六は、あたまもよく、まじめでしたので、郡奉行という、高いみぶんに、ついでました。

しごとねっしんな平六は、じぶんの、とりしまる土地の、あちらこちらを、まいにちのように、見まわっておりました。

なかに、浅野とよばれる、ところがありました。このころのやさしい奉行の平六は、このあたりにくると、いつも、このころを、いためるのです。

田んぼは、どこにも見あたりません。やせた畑があるだけで、坂の多い荒地ばかりです。カンカン照りの、日ざしのもとで、草とりをしている百姓に、平六は声をかけました。

「これ、そのもの、ちと、たずねたいことがある」

「おや、これはこれ、お奉行さま、どんなことで、ございましょうか」

「ことしの、さくもつの、できぐあいは、どうじゃな」

百姓は、ことばがつまってしまいました。年貢をおさめることも、できな

いほど、不作だったからでした。

「はい、それがア、そのオ……」

頭のいい、奉行の平六は、こころあたりの百姓の、くるしみは、よく

わかっていました。アワとかヒエがせいっぱいで、白いごほんなど

ろくに、食べたこともない者ばかりでした。

「のう、おまえたちも百姓なら、田をひらき、米をつくってみないか、

そうすりゃ、白いごほんも、くえるようになるじゃろ」



百姓は、びっくりして、しばらくは、声もでませんでした。

それもそのはずです。このあたりは、水がたいそう不便なところ。お奉行さま、そりゃ、むりというものですじゃ。あの香東川から、水を

ひくなんて、ゆめみたいなことがおこらんかぎり、このあたりに田をつくるなんて、ばかた、話ですじゃ」

「うむ、しかしのう、その香東川から水がくるかもしれんぞ。いずれ、ゆめか、ゆめでないか、わかる時がある」

百姓は、お奉行さまの頭が、おかしくなったかとおもったほどでした。しばらくした、ある夜のこと、浅野の村むらはおおさわぎになりました。

「ひ、ひとだまの、ぎょうれつじゃあ」

「まさか、あれは、キツネのよめいりじゃ」

「それならよいが、なにかの、たたりじゃあるまいかのう」

村むらのおどろくも、むりはありません。夜のやみのなか、浅野の南の、はしから北のはしまで、一列に、てんと、火がならんでいるのです。

「みんな、しんばいせんでええ、あれはな、お奉行さまが、ため池をつくるため、人夫にちようらんき、もたせて、土地の高い、低いを、しらべと

りなさんじゃ」

「ほんまかいな。そりゃ、なんとも、ありがたいことじゃ」

「わしらのためじゃ。このまま、だまって、見ているわけにはいかんぞ、

わしは、てつだいにいくが、みんなはどうする」

「そうじゃ、そうじゃ、みんな、てつだいに、いこう」

村むらの人々は、こぞ、てつだいに、かけつけました。

そして、まいにち、まいにち、あせみどろになつて、はたらきました。

やがて、香東川から水をひく水路も完成し、できあがった、ため池は、新

池と名づけられました。

この一番の百姓にとって、こんなにうれしいことはありません。

「白いおまんまが食べられる。わしらも、お米をつくれるんや」

人々は、いきいきとほたらき、荒地は、つきつぎとひらかれ、やがて、

稲穂がみのり、白いごほんを、食べることができるようになったのです。



「お奉行さまに、足をむけてねたら、バチがあたるぞ」
 「平六さまは、わしら百姓の神さまじゃ」
 百姓たちは、平六のすがたを、とおくに見ただけで、手をあわせて、おがむほどになったのです。
 ところが、さむらいのなかには、平六のひょうぼんのよさを、ねたむ者がでてきました。高松のお城では、
 「殿、矢部平六は、百姓のためとかもうして、新池をつくり、さらにあちこちに水路をめぐらしてありますが、じつは、敵とつうじて、高松城を水ぜめにするときの、じゃんびきを、しているものと、おもわれます。早いうちに、てを、おうちくさりませ」
 などと、ありもしない、つけ口をするしまつです。
 ほんとうのわけをしらない殿さまは、すっかりはらをたて、しらべもしないで平六をとらえさせ、河波へ、おいやっせました。
 これを知った百姓たちは、じだんだんで、くやしがりしました。
 「なんてひどい殿さまじゃ、うそつばちの、つけ口を、まにうけるなんて、あいた口がふさがらんわい」
 こんなわる口が、もし家来に知れたら、切りころされてしまいます。百姓たちは、かくれてこっそりと、話しあっておりました。
 「わしらは、どんなことがあっても、平六さまの、ご恩は、わすれるわけにはいかんぞ」
 「じゃが、平六さまの、名をだしただけでも、おとがめをうけるんや」
 「いいことがある、平六さまを神さまにして、まつるんや、水神さまといっしょにして、わしらが平六さまをおがんでることを、きづかれんように、とほけるんじゃ」
 そして、みんなで、ちえをしぼり、めいめいが、くふうをこらした、おまつりの日がやってきました。



わざと、へんてこりんな、かつこうをして、わざとおどけて、わざとゆっくりあるく、なんともふしぎな、おもしろい、おまつりでした。
 おまつりは、ひょうぼんになりましたが、百姓たちの平六をおもう、このころのなかば、ほかのだれにも、わかりませんでした。
 この、ひょうきんな、おまつりは「ひょうげ、まつり」とよばれるようになり、いまでもつづいて、いるのです。

川から水をひいてたくわえる

さて、このお話は、かんがいのお話です。
 香川県の讃岐平野は、日照りにはよい地域で、昔から夏の水不足にはたいへんやまされてきたところでした。
 讃岐平野には、弘法大師が改築した大きなため池「讃岐池」をはじめ、大小あわせて、かぞえきれないほどのため池がつくられています。
 お話の新池も、その一つです。瀬戸内海に面した高松市にそって流れる香東川を10数km、さかのぼった香川町の川内原に新池があります。
 浅野地区とよばれるこのあたりは、土地の高気な荒れ地だったそう。香東川から水をひくためにはたいへん苦勞したことでしょう。その後、何回か改修された新池は、いまでは120万㎡の貯水量を持ち、220ヘクタールの水田をうるおしています。
 「ひょうげ」とは、おどける、という意味ですが、この、おどけたお祭りは、いまでは香川県の無形文化財としてうけつがれ、毎年9月には、秋まつりのさきかけのようになりおこなわれています。まつりの神具一式は農作物でつくられ、ぜいたくなものは一切なく、手づくりのものばかりです。水をもらった恩をけっしておぼれぬ、まじめで働き者、しかも、おどらかな讃岐の人たちのこころがわがかる気がします。
 香東川は讃岐山脈から渓谷を流れてくんだり、香川町あたりから讃岐平野にでると、はばまっすぐに瀬戸内海にむかって流れる。長さ約32kmのおだやかな川です。
 新池のほかにも、いくつかのため池をうるおし、讃岐の水田を守りつづけているのです。

ミンツチのむんべり

むかし、北海道の十勝平野が自然のままのすがたで広がっていたころ、シベ川〔今の十勝川〕の上流に、小さなアイヌのコタン〔村〕がありました。そのコタンでは、狩りの名人と評判の高い老酋長が、ひとり娘と二人だけで、ひっそりとくらしていました。

酋長はからだも大きくて、たくましい腕を凝らしていました。しかし、動きにすばやかさは、もうありませんでした。かみのけも、ふさふさしたひげも、雪のようにまっ白で、ひたいには、深いしわがきざまれていました。北海道の、冬は早く、もう、十勝の平野をすっぽりと雪でつつんでしまいましたが、アイヌにとっては、冬などなんでもないはずでした。川をのぼってくるサケをとり、山のシカを狩るなどしていれば、けっして、食べものにこまることはないのです。

ところが、いまの酋長にとっては、冬はつらい季節でした。酋長は、きょうも、朝から狩りにでていましたが、まだ、うさぎ一匹とらえることができませんでした。

「十勝で、ならぶものがない。狩りの名手といわれた、このわしが、手ぶらでかえるなんて、なんともなげけないことじゃ」

足どりもおもく、山を降りてきた酋長は、コタンに近づくにつれ、

「おやっ」と目をこらしました。

冬の日ぐれは早く、夕闇がコタンをつつんでおりましたが、チセ〔家〕の前に黒い人かげをみつけたのです。

近づくこと、見知らぬ若者がたっていました。

「だれじゃ、いまごろ、なんの用があつてきたのか」

身がまえる酋長のまえに、若者は、なれなれしく近づいてきました。



「あなたが狩りの名手と名高いコタンコロクル〔酋長〕ですね、わたしはあなたに仕えたいとおもつて、はるばるとやってきました。どうか、ここへおいでください」

そういって、ていねいに、おじぎをしました。

「わしは、いまでは狩りの名手ではない。なげけないことだが、いまも狩りからかえったばかりだが、見るがいい、なにひとつ、もってはいない」

「わたしは、有名な、あなたのコタンのウタリ〔仲間〕になりたくてきたのです。わたしは、若いし、力もある、目もいい。かならず役に立ちます」

酋長は、あまりにも若者がねっしんなので、とうとう、こんまけしておいてやることにしました。

若者は、おどろくほどのはたらきものでした。

そればかりではありません。若者のいくさぎさぎには、ふしぎなほど、えものがあつまるのです。若者がシベ川にサクをつくれば、サクがこわれるほどのサケがかかりました。弓矢をもって山へはいれば、かならずエソシカのむれにであいました。まいにち、若者は、ありあまるほどの、えものを、さげてかえつてきたのです。

若者がきてからというもの、酋長の家はすっかりゆたかになりました。

そんなある日、若者は、酋長に、「あなたの娘を娶にいただきたい」と願ひできました。

娘のムコにするには、少し気がかりなことがありました。

それは、若者が狩りにでるまえに、カムイノミ〔神をおがむ〕をわすれることでした。アイヌは、じぶんたちの生活は、つねに、カムイ〔神〕とともにあると信じていたので、カムイノミをわすれるなんて、考えられないことだったのです。それに、えものをとりするとも気がかりでした。

アイヌは、自然をうやまい、大切にします。けっして、生きもののきむだに、とることは、しないからです。

しかし、これから先のめんどろを見てもらえらばと、気がすすまぬままに、酋長は、若者のもついでさうけいれ、ムコにしたのです。

